

宗岡二中だより 6月号



令和7年6月2日

自ら学び考える生徒

学校教育目標：心豊かな優しい生徒

明るく元気な生徒

教えるとは二度学ぶことである

Enseigner, c'est apprendre deux fois.

校長 伊藤大輔

本年度も二か月が過ぎました。新しい環境に順応しながら、どの生徒も力を伸ばそうとしています。学校は学びの機会にあふれています。学びの拠点は授業です。学びに浸れる授業となるように力を合わせていますか。机の周りにゴミは落ちていませんか。礼節を保っていますか。授業は学ぶ力を磨く場です。学ぶ理由は「わたし」を大切に育てることにあります。誰かを出し抜いたり、誰かよりも優位に立ったりするためではないです。学ぶことは一生続きます。学ぶことで自分が育ちます。「私は頭がよくない」とか「成績が伸びないのは仕方がない」と端(はな)から自分を見下していませんか。自分は出来ない人だと暗示をかけていませんか。学ぶ力を付けるには、工夫が必要です。だから、学び方を学ぶのです。授業はそのための時間でもあるのです。そこで、今号では学び方、とりわけ授業内容の理解と定着に関する私なりの考えを述べます。

授業の内容を理解する人は、授業を自分事になっています。たとえば先生の発問に対して、「誰かが答えてくれるだろう」と考えるうちは、授業は他人事です。また黒板に先生が書いたことを丁寧にノートに写し取ることをもって、授業に集中したと満足しているうちは、授業が自分事には至りません。自分事にする人は「先生の話聴きながら、その日の『ねらい』を捉えて覚える」「その日の課題を自力で考える／仲間と一緒に考える」「ノートには自分で思い付いたこと(疑問に思ったこと、その日に学んだこと、学べなかったことなど)をメモする」といった活動を大事にします。理解するには理解しようとするこ

とが肝心なのです。そして、このように試行錯誤する経験が内容の定着を促す鍵となります。

授業内容の定着は授業で理解したことを思い出せるかどうかにかかっています。カナダのウォータールー大学での研究は「その日の授業をその日のうちに(帰宅後すぐに)思い出すことが定着につながる可能性」を示しました。だらだら時間をかけても思い出す作業は長続きはしません。理想は1日1教科3分。6時間の授業内容であれば20分以内で集中して思い出すことです。そして、教師になったつもりで自分で自分に教える方法を私は薦めます。ねらい・課題・解法・まとめなど授業の中身について、要点を書きながら(触覚)、書いたものを見ながら(視覚)、ポイントを声に出しながら(聴覚)脳に働きかけるのです。各感覚は脳につながっています。

さて今号の標題はフランスの思想家ジョセフ・ジュベールの言葉です。学習心理学の研究結果につながる至言です。教えることは、理解し(input)、表出(output)する営みです。表出する情報を人の脳は重要事項と判断します。そして記憶に留めようとします。人は忘れる生き物です。一夜漬けで無理やり覚えようとしても、定着しないのは勉強した瞬間から忘れるからです。だからといって、あきらめるのは軽率です。脳のクセを知り、記憶に残す方法を工夫すればいいのです。学習後24時間以内に10分間、思い出す作業(=復習)をすれば、その学習の記憶は100%戻るそうです。出発点は授業です。授業を丁寧に自分事として取り組む者にのみ学ぶ力は宿るのです。